The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	管野須賀子の“ 生き方” と無政府主義の必然
Author(s)	Dolinsek, Saso
Citation	年報人間科学. 2020, 41, p. 111-127
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75381
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈論文〉

管野須賀子の〝生き方〟と無政府主義の必然

Kanno Sugako's "Lifestyle" and the Necessity of Anarchism

Dolinšek, Sašo（ドリンシェク　サショ）

論文要旨

本論文では、明治時代に活躍した記者・革命家である管野須賀子の思想および〝生き方〟における無政府主義の位置と重要性に関して論じる。須賀子の思想形成をフェミニズム・社会主義・無政府主義の三つのイデオロギーを参照軸として分析する。須賀子におけるこれらイデオロギーの関係を検討する中で、須賀子の受けた性差別に起因する問題は、社会主義によっては解決不可能であったことを示す。そのことにより、国家の廃絶を唱える狭義の無政府主義に留まらず、何にも誰にも支配されない自由な〝生き方〟としての無政府主義／アナーキズムに解決が求められる必然性を示す。須賀子の〝生き方〟と、広義のアナーキズムとが響きあう通底を探る。

キーワード

管野須賀子、フェミニズム、社会主義、無政府主義、生き方

1．序論

本稿は、2019年3月に大阪大学人間科学研究科に提出した修士論文「『日本的なるもの』への抵抗と超克――管野須賀子と金子文子の無政府主義――」より再構成したものである。この論文において論者は、管野須賀子（1881年～1911年、以下本稿では「須賀子」と呼ぶ）と金子文子（1881年～1926年）の思想と活動を紹介し、日本の無政府主義（アナーキズム）運動史における二人の重要性について論じた。紙幅の都合上本稿では、金子文子についての論述は割愛し、明治時代に女性記者として、また革命家として活動し、大逆事件（1910～1911年）で処刑された須賀子のみを紹介する。

本稿は、須賀子の思想を形成し、また活動を動機づけした主要な要素としてフェミニズム、社会主義、無政府主義を取り上げ、それらの要素が須賀子の思想の中で、相補的に展開してゆく過程の必然を明らかにする。先取りして言えば、須賀子の被った差別や圧政は「物を持たないがゆえに自身の労働力を売らざるを得ない労働者と、生産手段を持つため労働者を搾取して利潤をあげる資本家のあいだの、矛盾と闘争」という、労働－資本をめぐる権力関係のみによっては十分に解明され得ない、というのが論者の立場であり、また本稿が論証しようとするテーゼである。例えば須賀子が、平等を唱えた当時の左翼運動の先頭に立っていたにもかかわらず、社会主義界においても性差別の被害者になったという事実は、国家的イデオ

ロギーと文化とに深く根付いた抑圧の厄介さを示している。すなわち女性に対する差別や抑圧は、社会主義が批判するその典型的な労働者対資本家の関係以外の形態においても出現しうる。労働者対資本家の関係を経済的平等によって解決せんとする社会主義は、経済的平等を実現する陰で、何か大切な物事を欠落させている。権力への究極の否定としての無政府主義こそが、須賀子が人生で被った様々に錯綜する抑圧に対して、フェミニズムと社会主義とを含んだ最も包括的な理論・活動であった――それが須賀子の思想と〝生き方〟から、いま学び得ることだ、と論者は考えている。

2．須賀子の来歴

ここでは主としてRaddeker（[1997] 2016)、関口（2014)、管野須賀子研究会（2016)、田中（2016）に依拠して須賀子の履歴を概観する。管野須賀子は1881年に大阪で生まれた。幼少期の幸せは長く続かなかった。母親に早逝され、また父親の事業の不振によって、須賀子は尋常高等小学校補習科卒業後、すぐに就職する必要に迫られた。当時多方面で活躍していた文筆家・宇田川文海を介して、須賀子は『大阪朝報』という新聞に記事を掲載する機会を得、そこで芸妓・畜妾をめぐる問題、遊蕩などの悪習に対する非難、また男女平等や一夫一婦制の確立など、数多くの記事を著した。特に1903年に天王寺で開催された第５回勧業博覧会において、余興として開催が予定されていた芸妓踊りを辛辣に批判し、その中止を唱える論陣を張った。またこの間に洗礼を受け、プロテスタント系のキリスト教に入信した。

時が経つにつれ、須賀子の批判的な眼差しは、娼妓や芸妓それぞれ個人の行為から、そのような仕事を女性に強いる社会や体制へと移っていった。そして、このような眼差しの移り変わりと並行して、堺利彦をはじめとした平民社社員を介し、彼女は社会主義の思想を紹介されることになる。須賀子にとって社会主義とは、人々、特に女性が被る差別、虐待、搾取かつ女性に対する男性の支配などの社会問題・人権問題を解消し、平等を原理とした社会をもたらす究極の理想であった。さらに1906年、紀州田辺において『牟婁新報』という新聞の編集に臨時に携わり、そこで荒畑寒村と知り合いになった須賀子は、寒村とともに社会主義・廃娼論を展開した。同年後半に須賀子は東京へ移住、『毎日電報』に労働者や女性の悲惨な状態に対する批判など社会主義的な記事を掲出していた。

ここから須賀子につぎつぎと苦難が襲いかかる。1907年に妹が結核で世を去り、加えて須賀子も結核に罹患し、これは終生須賀子を苦しませた。さらに1908年、多数の社会主義者・無政府主義者が検挙される「赤旗事件」に須賀子も巻き込まれた。実際には無実であったにもかかわらず、拘束され激しい追及を受けた体験から、須賀子は、国家機構によって社会主義を実現するという構想に幻滅し、国家の崩壊の必要性を悟った。こうして、国家に対する失望が、国家の不必要性を説く無政府主義の観念を、須賀子に抱かせたのである。幸徳秋水と同志、また恋人になった須賀子は、彼とともに『自由思想』という雑誌の出版を試みるなどの、国家と体制に対する抵抗活動に没頭した。

1909年ごろ、須賀子たちは、大まかなものではあったが、宮下太吉と天皇暗殺を計画した。この陰謀を察知した政府は、社会主義者と無政府主義者に対する大規模な迫害を開始した。須賀子たちは逮捕さ

れ、1910年から翌年にかけてのいわゆる「大逆事件」において、須賀子と秋水を含めた12名が死刑宣告を受けた。須賀子は処刑の直前、絞首台上で「われ主義のため死す、万歳」に叫んだ、という（三本ほか2016：88）。

以上が須賀子に関するおおまかな履歴である。

3．管野須賀子の思想

須賀子の思想を論じるにあたっては様々なアプローチがありうるが、本稿では対象とするトピックを限定して論じたい。序論で述べたように、具体的にはフェミニズム・社会主義・無政府主義という、最も重要と考えられる三つの様相それぞれについて論じながら、それらの関係を考察する。したがって、キリスト教や死に対する態度、また非／厭戦論に関する意見の変遷などは、個別ではなく、上記の三つの主義と度外視不可能な関係を持つ際にだけ触れる。なぜなら、キリスト教や戦争に関する須賀子の考えはその履歴の中で一時的な位置しか占めていないが、上記の三つの主義は死の直前まで彼女の思想を形成し続けていたからである。さらに、本稿において、この三つの主義の相互関係を探ることがその目的であるため、キリスト教や非／厭戦論はこの目的を達成するには、不可欠な役割を果たしてはいないということもいえるのである。

3.1 フェミニズム

3.1.1 廃娼論と道徳的エリート主義

須賀子は新聞記者時代、社会における女性の位置づけをめぐる問題について論争的な記事を多く執筆したが、まず近代日本において女性がおかれた環境を概観しておきたい。明治維新以降、日本社会は大きく変化していくが、当時の男性と比較して、女性の権利は厳重に限定され、地位も極めて低かった。女性を抑圧するさまざまな法律が制定され、例えば1898年に制定された民法（Mackie 2003：23；Hane ed. 1988：9、編集者の序論から）夫が戸主であり、財産は長男に相続されると定められていた一方、女性には所有権がなく、法的には未成年と同様に分類されていた。婚姻の際も、女性は必ず夫の戸籍に入らされた[1)]。

このような、女性に対して抑圧的な社会で成長した須賀子が、女性の社会的地位に関して確固たる意見を持つまでになった経緯を、『大阪朝報』に掲載した「おもかげ」という自伝的記事（管野1984b：292-303）に探ってみよう。主人公・秋子は、「お転婆」であるにもかかわらず女らしさというジェンダー的な役割を親から強いられること、また女性にはさまざまな美点があるにもかかわらず、社会は女性の外見だけを重視していることを訴える。当時の日本の男子は「婦人を侮蔑する事、尤も甚しく、常に一の翫弄物として之を覗、たまたま正義の人の口よりして、女権拡張問題など出づるあるも、之に耳を傾くる者」が少ないと指摘している（管野1984a：8）。初期の記事における須賀子の批判には、道徳的な側面が著しいという特徴がある。具体的には、妾を囲ったり遊廓を訪ねたりする男性の行動を非難しながら、一夫一妻

制を平等な男女関係として提唱している。女性の無抵抗の態度にも批判の矛先を向け、男性の下品な行為を知っているにもかかわらず、「然らば何故に卿等は夫を黙許するゝか、卿等は依然封建時代の貞女を以て理想とさるゝか、イヤ自己の権利を認められないか、高等下女、床の置物に甘んじてゐらるゝか、妻として、半身として、婦人としての侮辱を平気で耐え忍ばるゝか」と女性の服従の態度を問い質している（同前：365）。すなわち須賀子にとって、女性は本性上受動的な存在ではあり得ず、受動性を乗り越える意志を潜在する存在として想定されているのである。

須賀子が特に情熱を込めて提唱しているのは廃娼論である。1903年に開催される第5回内国勧業博覧会に、娼妓や芸妓を出演させることに反対し、そのような「醜業」に携わる女性を「醜業婦」と呼んだ。つまり須賀子は、道徳的な観点から、売春婦を道徳の頽廃した個人として攻撃したのである。さらに、「演舞会、則ち醜業婦の歌舞は、博覧会の神聖を汚し、外国人の目に国辱を曝すものである」とさえも批判した（同前：265）。このような言動を鑑みれば、須賀子の初期のフェミニズムは、愛国主義と福沢諭吉風の啓蒙思想の線上にあると推定できる。Raddeker（[1997] 2016：146）が論じているように、芸妓による舞踏が、博覧会の名誉および威厳に対する汚辱だ、という須賀子の批判には、道徳的なエリート主義が含意されているといえるのである。

3.1.2 個人の問題から社会の問題へ

社会主義との接触、特に平民社との出会い以降、須賀子のフェミニズムは、社会と体制に対する批判へと広がってゆく。道徳に基づいた解決では不十分であることを理解した須賀子は、社会全体に染み込んでいる体制の変革を掲げる必要性に目覚めた。このことは『牟婁新報』時代に最も明白にみられる。例えば、和歌山県において公娼許可が下りた直後、憤慨した須賀子は、「県下の女子に檄す」（管野1984b：69-71）で次のように猛反対の立場を表明した。

> 公娼許可 !!!　公娼許可 !!!　噫、諸君。
> 憐れむ可き貧弱なる人の子をして、公然淫を鬻がしめんとする、凡そ是程、惨忍暴虐、言はふ様なき大罪悪、大侮辱が他にありませうか。戦捷の余栄とかで一等国に進んだとか何とか、口に文明を叫んで居る日本が公然売淫を奨励するとは、何たる矛盾でありませう、何たる痴（たわ）けさ、かげんでせう。余りの事に開いた口が塞がらないではありませんか。
> 諸君、此底の知れない痴けた大馬鹿な大罪悪は、そも何に起因するのでありませうか。諸君は何とお考へです。
> 是れ畢竟、婦人を、人として認めない、只一種の翫弄物視（おもちゃし）して居る人間が、此社会に居るからであります。（同前：69-70）

すなわち須賀子にとって娼妓問題の責任は、売春に携わる個人にではなく、むしろそのような制度を承認する社会および国家（この事例においては県庁）にあると考えていた。また同時期の記事「肱鉄砲」（同

前：111-114）において、女性にだけ貞操を強制し、自らは貞操を実践しようとしない男性を非難し、そのダブル・スタンダードについて大いなる疑問を呈していた。「社会の滔滔たる男子が、臆面も無く婦人貞操を口にするイケ図々しさに至っては、只唯、呆れ入れざるを得ざるなり」（同前：112）。さらに須賀子は、良妻賢母という概念に対しても同様の攻撃を行い、腐敗堕落した男性が女性に対して良妻賢母を要求することは大いなる矛盾だ、と指摘している。

> されど悲しい哉、現今の社会制度に於ては、此大矛盾、大侮辱を尚且つ忍んで、総ての婦人が男子の奴隷とならざるを得ざるは何故ぞや。是れ畢竟、生活の不安ちふ根本の一大問題のあればなり。（同前：113）

つまり、このような矛盾は社会全体の問題だと須賀子は考えた。須賀子は、女性に対する男性の支配を「男子閥」と呼ぶ。この問題の解決は「社会主義に俟たざる可らずと雖も、而も我等婦人は尚夫（それ）以外に、この我儘勝手なる男子閥とも戦はざる可からざるなり」、さらに進んで「労働者の資本家に対する階級打破の夫に比して、我等婦人が男子閥に対する平等自由の要求は、只己が意志一つにて、声を揚げず、血を流さず、至って容易に得らるゝに非ずや」と、「男子閥」に対する闘争を呼びかけている（同前）。社会主義は、男女平等および女性の自立に不可欠な経済的平等をもたらす社会制度であるが、須賀子の主張の肝心な点は、女性はただ社会主義の到来を待つだけに満足してはいけない、とするところにある。

例えば「男子側面観」で須賀子は、男性とは本来強くて偉い人であるという男性観に対して論駁している（同前：139-141）。男性は実際には弱い者であるため、気の強い女性を避けながら、意気地のない従順な女性のほうを好んでいる。それにもかかわらず男性が偉そうな態度をとっているのは、実際には、女性が情けまたは多年におよぶ抑圧の習慣によって積極的に男性を責めないことによる、と説明している。

さて、牟婁新報時代の須賀子において、キリスト教的道徳観と社会主義とは、どのような関係性にあったのだろうか。この時期の須賀子は、確かに社会主義の観点を自身の評論に組み入れると同時に、男性の〝ダブル・スタンダード〟を解明し、批判している。〝ダブル・スタンダード〟については先にも触れたが、例えば貞操について、本来的に望ましくない美徳として批判することなく、女性にだけ一方的に貞操を要求し、男性自らには適用しない、という思惟様式である。このような須賀子の批判の視座を念頭に置けば、伝統的な道徳観も、未だ須賀子の思想を一定程度規定していると考えられる。なぜなら、女性の貞操という概念そのものではなく、その単なる不平等な適用を批判の対象としているからである。つまり、彼女は貞操を未だ美徳とみなしたということである。また、「理想の婦人」（同前：175-178）における批判の対象は、飾り物としての女性観、ならびにそのような女性像に応えようとする女性の態度に向けられた。須賀子はより実用的なファッションを勧め、窮屈な帯や島田髷・丸髷など伝統的な女性の髪型、また着物の長い袖など、女性の動作の自由を制限する非実用的な格好の廃止を唱えた。彼女は、女性の未婚・既婚が識別不可能になるよう提唱している（Raddeker［1997］2016：165）。

ところで『牟婁新報』に掲載された記事「女としての希望」（管野1984b：143-145）において、須賀

子は自らの欲する〝生き方〟について触れていた。この記事は、須賀子自身にとって理想的な夫婦関係を描写しているが、それは嫉妬などのない、愛情でのみつながった関係であるという。さらに興味深いことにこの記事において須賀子は、その理想の伴侶と共に社会の改善のために戦い、力を尽くした果ての「情死」を夢見ている。

> 強き強き情死、即ち、剛胆に、同心一体となりて主義の為に戦ひ、理想の為に奮闘して、刀折れ矢尽きたるの時（体力の）、大手を振りて花々しくする情死なり。
> 愉快ならずや、斯くて相愛の夫妻が、最後の笑を交わすの瞬間、痛快ならずや。妾の理想は即ち是れ。（同前：144）

須賀子がのちに革命家として活動する事実を知っているわれわれにとって、この引用には、予言的な含意を見て取らざるを得ない。「子供を生み、落ち着いた家庭の主婦となる」という一般的な理想あるいは規範は、須賀子の夢から最もかけ離れたところにある。良妻賢母などにならず、須賀子は自由に、自身の欲する〝生き方〟を希望する。このことが示唆するのは、須賀子の思想を考えるにあたっては、その理論だけでなく、〝生き方〟をも含めて再検討しなければならない、ということである。

3.1.3 〝生き方〟としてのフェミニズム

「良妻賢母」の文字どおり、家事と子育てが女性の主な仕事だとされ、あるいは貧困にあえぐ低い階級に属する女性は、繊維工業労働者として苦役についた時代にあって、そのような趨勢に抵抗すべく、須賀子は記者を志し、筆を執って自らの才能を発揮した。最初に勤めた新聞『大阪朝報』の社長は当初、女性の執筆能力に対して懐疑心を抱いており、須賀子の雇用を躊躇していたが、須賀子の文章がその偏見を覆し、またその雇用の正しさを確証させた（田中2016：15-16）。須賀子は「女子にも男子のする事の出来ぬ筈はない」という言葉を、自らの活動をもって証明している（管野1984c：140）。

執筆活動に加えて須賀子は、当時の女性抑圧的な政策と価値観に反して、社会的・政治的な運動にも参加した。関口（2014：144、153-154）が指摘しているように、「新しい女」と大杉栄らは須賀子を評価していた。女子向けの公的な中等教育を受けた経験のない須賀子はかえって、政府によって唱導された女性像を受け入れることなく、自由に行動しているように見えたのだろう。一般的に教育は、啓蒙すなわち旧い思想からの解放の手段と考えられているが、須賀子の事例を考えるに、それとは逆の効果を生む装置、つまり人々を洗脳する手段である、と理解しておくのが適切だろう。フェミニストであっても、教育という名の国家的洗脳から無縁でありつづけることは困難であった。なぜなら「男は外を務め、女は内を治む」という性的分業の理想は教育を介してフェミニズムなど進歩的な思想を持つ女性の心にも浸透したからである。それゆえに国家との直接な対峙を男性に任せながら、その男性による戦いを後衛から支持する態度をとり、結果的に従来のジェンダー秩序を維持もしくは強化してしまった、例えば堺利彦の妻である堺為子や大杉栄の内妻である堀保子[2)]（同前：153-155）などのような女性たちが、当時の社会主義やフェミ

ニスト界にも一定数いたのである。

須賀子の〝生き方〟を問題にする本稿は、恋愛関係についても論じるべきだと考える。既に触れたように、須賀子は1902年、商家の男性と離婚したが、その時須賀子は自らの意志を確立したと言える。加えて荒畑寒村との関係について考察すれば、親や世間の意見に関わりなく、好きな人と自由に恋愛するという発想が読み取りうるだろう。事実、二人の関係が悪化した際には、その関係を自ら絶っている。また秋水との恋愛関係について言えば、同志からの反発は確かに須賀子を動揺させるが、それにもかかわらず秋水と付き合い続けている。そして最後に獄中で秋水が千代子との復縁を求めたという事実を知ると、須賀子は秋水と別れ、独り死を迎えていくのであった。

この恋愛関係の経歴から、須賀子はエマ・ゴールドマンや大杉栄のように、「自由恋愛」という無政府主義の理想を実行した、という解釈がある（同前：147-153；Raddeker［1997］2016：184-185）。一方で「自由恋愛」には、婚姻というような社会的な機関において一生一人の配偶者の元に束縛されることがなく、未婚状態で思うがままに相手を替えたりし、心の赴くままに男女交際を行うという意味もあった。大杉栄が伊藤野枝を含む複数の相手と付き合った事例を思い起こしても良いだろう。しかし、自由恋愛に関するこのような解釈は、特に男性が数人の相手を気まぐれに交代させる口実として乱用されることがあると関口は指摘している（関口2014：225-230）。しかし、Raddeker（［1997］2016：185）によれば、須賀子にとって自由に恋をすることとは、親族や世間が恋愛相手を選ぶのではなく、自ら選んだ好きな相手と付き合ったり結婚したりすることのみを意味する、という。29歳の須賀子にとって、子供を産まずに亡くなること自体、当時の女性像・女性観の期待や要求に対する反逆だとも言えよう。

3.1.4 須賀子にとってのフェミニズム

さて、ここまで論者は、一般的なフェミニズム概念を用いて論じてきたが、Molony（2005：463-468）によれば、当時の日本におけるフェミニズムは、女性権利（以下は女権）と女性解放に分類できるという。前者は例えば、投票権利や政治参加への権利の獲得など、既成の体制への参入を求める運動であるのに対して、後者は家父長制や国家による抑圧からの解放を唱える革命的な蜂起である、Molonyは言う。

しかし論者の見解では、須賀子はこれら二つの範疇には還元し得ない。須賀子は当初、道徳的観点から男女平等を提唱していたが、それは参政権の獲得など既存の体制に対する参入などを意味するのではなく、一夫一妻制など、性的慣習あるいは婚姻制度などに関する平等であった。このことを鑑みれば、須賀子のフェミニズムは、Molonyの範疇論で言えば「女性解放論」である。しかしながら、社会主義者となった後にも、体制の枠組みを理解しつつ理想社会の実現を要求していることを考えれば、須賀子は「女権」の獲得を唱えているともいえる。つまりMolonyのいう二つの範疇は必ずしも排他的なものではない、ということが須賀子の事例から言いうる。

とはいえ、無政府主義に移行してからの須賀子にとって、体制との妥協は全く不可能となった。以後の須賀子が、「女性解放論」の体現者であることは明確だろう。その上Raddeker（［1997］2016：23、24）が論じているように、無政府主義者として須賀子が、国民全体の最高の父親とされた天皇に対する暗殺を

企てるという反逆の覚悟を獲得したことは、家父長制に対する抵抗の極限的形態だとも言い得る。

3.2 社会主義

3.2.1 工場と監獄

日清・日露戦争の勃発は産業化を大きく拡張し、それは工場労働者の増加をもたらし、労働者階級を形成していった（Crump 1983：7）。格差が拡大していく趨勢下、社会に不満や不安を抱く人々も出現し、自身の不幸や境遇を解説し得る考え方が希求されるようになった。つまり、従来の社会の捉え方とは異なった、社会主義が導入されるに最もふさわしい状況となっていたのである。

数多くの女性が、特に繊維工業に就業し、低い俸給と引き換えに長時間重労働を強いられ、寮に居住させられた。20世紀の初頭、繊維工業労働者は8〜9割が女性であり、その中の49％は20歳以下、13％は14歳以下であった。規則を守らない場合には、身体的な罰を与えられ、栄養不足と劣悪な労働環境によって労働者の体調が悪化し、結核などにも感染することがあった（Hane ed. 1988：13、編集者の序論から）。

階級闘争に関する須賀子の考えは徐々に先鋭化していったが、その芽生えは既に『大阪朝報』にみられる。例えば、「公園と名士」という記事の「針の山」、および「女工の虐待」と題された2点（管野1948a：126-127）では、ある紡績会社において労働者が逃げ出せないようにガラスの破片が塀に設置されている景色を「針の山」にたとえ、このような悲惨な状況は、雇い主が労働者に対して愛をもって接していないからだ、と説明している。さらに、女工に対する虐待について、さまざまな悲惨な事例を挙げつつ、「全く我邦人中に尚人権を重んずるの念が少く、殊に女性に対する観念の誤れることが、其大なる原因ではあるまいか」と述べている（同前：127）。このように須賀子は労働者をめぐる諸問題に批判的な眼を向けていたが、しかし当時の須賀子はこれを道徳の欠如によるものとみなし、体制全体に対する社会主義的な攻撃は未だ行われていなかったことは、先に触れたとおりである。 『牟婁新報』に入社するまでに、須賀子は社会主義の思想を受け入れていた。これについて須賀子は「我等が理想は、四民平等の社会主義なり」と率直かつ公然と表明している（管野1984b：40）。とはいえ、この「理想」は革命的・急進的に国家と社会を一変させることを目指すものではなく、漸次実現すべき政治的な「理想」だとも述べている。

> されど、大廈は瞬間にして破壊し得ざるが如く、多年の月日を費やして根底を堅めし今日の階級制度は、一朝一夕に覆すべからず。急激に事を行はんとすれば、却って失敗の歴史をのみくり返すに止まるべし。然れば、我等はこの思想を希望として光明として先づ第一根本たる『自覚』を為し、自らを養ひ品性を高め、然して後徐々に、理想を実現に実行するの方法をとる可きなり。政治の何者たるをも知らず、社会経済の一部をも心得ず、世の大勢にも通ぜずして、何ぞ残酷なる社会と戦ひ、根底深き階級鉄柵を破壊し得るの勇気あらん。（同前）

階級社会は人々を拘束して「パンの奴隷」にしてしまうため（同前）、それに対して戦うべきだ、と主張している。須賀子はブルジョワジーに対して反感を持っており、「凡そ世の中に、ブル人間程、気障な

者は無いでせう」とも書いている（同前：48）。「牟婁日誌」において須賀子は、1906年3月29日に監獄の前で見た4人の囚人についての雑感を書き留めたが、それは囚人と、その面倒をみている巡査との間に、服装の色以外の差異はほぼないことを悟った、というものであった。「囚人同様矢張り無形の鉄鎖に縛られて居られる。パンの為に営々として堪えぬ苦痛をも忍んで居られる」と（同前：78）。さらに、子どもが働いている様子を目撃した際にも、このような不公平な制度は社会主義へと変わらなければならない、という確信を強めた（同前：87）という。須賀子は「覚めよ人、世に禍の根を絶つは社会主義なり、いざ起てや起て」と、あらゆる問題の解決が社会主義の到来によってなされることを期待していたのである（同前：106）。しかし、あらゆる問題が社会主義の到来によって解決され得るのかどうかというこの問題は、のちに触れることになるだろう。

さて『毎日電報』に勤めていた頃、須賀子は「女囚と女工」という記事を掲載した。この記事は八王子監獄と、とある撚糸工場とを比較し、繊維工業の工場は監獄に似た悲惨な環境であり、両者の間に差異はほぼない、とするものであった（同前：179-182）。加えて、女工についても女囚についても、このような境遇に置かれている原因は共通して貧困であるため、したがって両者は資本主義の犠牲者だともいえる。上流階級の女性たちはこのような不幸に耐え忍ぶ人々を直視するべき、と須賀子は主張している。「お縫さん」という記事（同前：188-190）においては、「お縫さん」と呼ばれる女性奉公人の朝から夜までの生活を描写し、あやうく死にかけるほど働きづめの状況を「大同小異の自由なき籠の鳥」に喩えている。

3.2.2 初島コミューン

さて、この時期の須賀子の記事において最も興味深いと考えられるのは「理想郷」である（同前：198-203）。この記事は、須賀子が体験した初島における人々の生活記録なのだが、須賀子は初島の生活を社会主義に近い暮らし方として記述しているのである。

> ここに一つの国ありて、貧富の別なく階級なく、人は皆一家族の如く睦みて、和気藹々たる月日を送り居ると仮定し給へ（後略）。
> （中略）然して此島の特色は、十七町歩余ある畑地は勿論（田地はなし）、総ての財産が全戸数に大凡均分され居るの一事にて、為に貧者なく富者なく、道具類にあれ消耗品にあれ、互いに相融通し相扶けて、共に楽しみ共に憂ひ、全島を挙げて一族の如く、些の階級なく自由に平等に、和気藹々と春風常に吹くの愉快なる生活をなし居る事なり。（同前：198-199）

この引用から伺えるように、須賀子にとって理想的な社会とは、マルクス主義者が提唱する〝産業化した社会主義〟というより、クロポトキンなどが唱える〝農民によるコミューンの形態をとる共産主義〟に近いといえる。加えて指摘すべきことは、この島の生活、特に土地の分割が、往古からの文化ではなく、ある時期の改革による結果だ、ということである（同前：199 ）。すなわち、伊藤野枝や高群逸枝などが理想社会の事例とみなした日本の伝統的な農村とは異なり、ある時期に従来の伝統を解消し、新たな人間

関係を作ったからこそ、より平等な生活を送れるようになった、と須賀子は把握しているのである。

赤旗事件後、須賀子は無政府主義者となるが、それは夢見る理想の社会が変わったのではなく、その理想を成し遂げるための手段が先鋭化した、と理解すべきである。須賀子が具体的にクロポトキン流の無政府共産主義を標榜したという証拠はないものの、クロポトキンの思想を抱いていた幸徳秋水との睦まじい関係かつ上記の記事における理想の社会に関する記述からは、須賀子の夢見ていた新たな社会はクロポトキンの無政府共産主義とそれほど異なるものではないと推測できる。

3.3 無政府主義

3.3.1「不倶戴天の女子の仇敵」は誰か

明治維新後、国家の権威が確立され、また臣民の忠誠が保障されるために、ナショナリスティックなイデオロギーが立てられた。国民の最高の父権者とされた天皇が国家の正当性を保障し、臣民はその神聖で最高の父に対する孝行、すなわち服従をする限り、調和や秩序が保たれた生活ができるというイデオロギーであった（Raddeker［1997］2016：22-23）。

しかしながら、イデオロギーとは現実的な権力関係かつその関係に伴う盲従や搾取や圧政を美化するものであるため、そのイデオロギーを見破り、背景にある国家の暴力を否定した人もいた。特に、国家は秩序を保障する存在ではなく、逆に多数の暴力と混乱の源泉であり、人々はむしろ国家のない場合に、より自由で秩序を保った生活ができると無政府主義者は考えた。したがって、無政府主義者と国家との衝突は必然的な経緯だと分析できるのである。

初期の須賀子の思想が、無政府主義から相当遠くにあったこと、また初期の須賀子のフェミニズムは忠君愛国を介して形成されたことはすでに触れた。田中（2016：23-24）が示唆するように、外国人に加えて天皇も出席した1903年の博覧会は須賀子にとって神聖なものであったと捉えれば、芸妓の舞踏を日本の恥とみなし、かつ博覧会を汚すことになる、という須賀子の発想がはじめて理解できるだろう。つまり初期の須賀子にとって、「醜業婦」の舞踏に反対を表明することは、愛国の表現だったのである。

ところで、日露戦争に関する須賀子の意見は一貫していないが、1903年に非戦論を唱えたとされている「絶交」という小説を発表して以降、須賀子は厭戦へと傾斜している。この背景に、須賀子が慰問に熱心であった矯風会の活動を厭戦の活動と解釈し、その影響下で厭戦論に傾いた小説を発表した可能性があるだろう（同前：36-37）。とはいえ須賀子は、忠君愛国の主義を男女平等の宣揚のために利用していた。例えば「戦争と婦人」（管野1984b：5-8）という記事においては、男性に対して、遊蕩などへ金銭を用いるより「其等の為に費す可き金額を軍費として国家に献納し給へ」と促している。

しかし、女性の地位を改善しない政府に対して、須賀子は徐々に失望の念を表明し始める。例えば、和歌山県において置娼が採用された時、須賀子は「無言の涙」（同前：68）という記事を発表し、次のように自らの憤怒を述べている。

弱者の敵何者ぞ !!!　貧民婦女の血に飽かんとする悪魔の巨魁とは何奴ぞ !!!

噫、醜漢ＸＸＸ。置娼を許可せりとや、咄、咄ツ。社会の敵、不倶戴天の女子の仇敵。
伯爵ＸＸＸＸ、知事ＸＸＸＸ。
県下の婦女子が絞る悲憤の涙に、溺らしむるとも、尚飽足らざるの咄、這ＸＸ。
噫、されど今更何をか言はん、只無言の涙あるのみ。

すでに社会主義的観点を自身の思想へと組み入れた須賀子は、女性の身体の売買を容認し、あるいはそれを推奨する社会のみならず、法令をもってそれを許可する政府にもまた、その憤慨をぶつけたのであった。

3.3.2 反抗の必然

一般的に、須賀子が無政府主義へと傾倒したのは赤旗事件の時点だと見做されている。しかしRaddeker（[1997] 2016：168-169）によれば、須賀子は既にそれ以前の著作の中においても、無政府主義を連想させる見解をしばしば表明している。主義のための情死を唱える「女としての希望」（前掲）以外には、特に『牟婁新報』に掲載した「憤片」（管野1984b：72）がその事例として挙げられる。

剣と銃丸は、只戦争てふ罪悪の、専有物では無い筈です。一国家の権利保護の名の下に、十万の壮丁をして平然たる社会なれば、其一国民の半数たる、婦人の権利の為には、不埒極まる鼠族の百疋や千疋〔殺〕したりとも、よも差支ありとは言い得じ。柴庵曰く、此れ幽月君の殺人哲学なり。

暴力による反抗を提唱することは、無政府主義者の言う直接行動に近い。しかし須賀子が実際に用いたのは、満腔の怒りに満ちた記事の執筆による抵抗であった。このことを踏まえれば、この時点の須賀子は、先にも触れたように、既成の体制内において社会主義を推進するという立場だったと言える。須賀子が確固たる無政府主義者となった決定的な契機は、赤旗事件において政府の弾圧と虐待とにさらされたことである。このとき、須賀子は、鬼検事と呼ばれる武富済にはじめて会い、その不公平な取り調べに苦しめられた。須賀子は「若し革命運動を起す際には、第一に貴官の頭へ爆裂弾を擲たんと覚悟」した、と武富に対する復讐を誓っている（管野1984c：195）。

赤旗事件後、須賀子の眼に映る政府は、あらゆる権威を喪失した空虚な存在となった。以降の須賀子の著作はそれまでに比べて減少するが、例えば『自由思想』所載の「平民社より」（管野1984b：242-244）という社説では、平民社に対する警察の監視をユーモアたっぷりに記述している。

本社と往来を隔てて某の屋敷がございます。数日前そこの生垣が破られて入口が出来、紅白の幕引廻した、一間に一間半ばかりの天幕が張られたので、オヤオヤ園遊会でもあるのかナと見て居りますと其中へ籐椅子と床几が運ばれて、警戒のお役人がちゃんと控へられたので、少々呆気にとられました。従来は二、三軒向う側の増田といふ産婆さんの家を本陣にして居たのが、今度は真正面へ、而も紅白

の幕といふ、素晴らしい景気をつけて、蟻の這出るのも見逃さないといふ意気込みなのですもの、可笑しいやら、気の毒なやら、是では却ってお上が広告して下さる様なものだと喜んで居ります。(同前：243)

危険をものともせずに、この弾圧を冗談めかして記述するほどまで権力を軽蔑している点は、まさしく無政府主義者に適切な態度だと評価できる。権力をこれほど軽蔑する須賀子であるため、天皇暗殺計画への参加が彼女に似つかわしくない行動だとはいえないだろう。天皇という存在は、須賀子の無政府主義的理想とは全くかけ離れた存在であった。「その理想は絶対の自由平等にある事故、自然皇室を認めないという結論に達するや、否、達せしめるや」と須賀子は「死出の道艸」で述べている（同前：261、「死出の道艸」については後に詳しく見る)。須賀子は絶対自由のみならず絶対平等も無政府主義の不可欠な要素だと強調してきたが、そのことは上下関係と服従に重きを置く日本国家のある種の基底的要素――その頂点には天皇制がある――に対して、宣戦を布告するものであった。大逆事件における官憲からの聴取では、「天子なるものは現在に於て経済上には掠奪の張本人、政治上には罪悪の根源、思想上には迷信の根本になって居りますから、此位置に在る人其ものを斃す必要がある」と天皇に対する忠誠と尊崇を完全に拒否した（管野1984c：199-200)。特に、「此位置に在る人」という表現は興味深い。当時の天皇、すなわち睦仁だけが問題の核心なのではなく、天皇位に就く者は誰であろうとも打倒すべきであり、言い換えれば天皇を戴く国家体制それ自体に存在する資格がないと断ずる点に、無政府主義的な特徴を看取ることができるのである。

3.3.3 犠牲の必然

獄中須賀子は「死出の道艸」(管野1984b：245-280）と題した日記を執筆した。その中で、死刑を迎える自身の心中を「己れを飾らず偽らず自ら欺かず」と書き留めている（同前：245)。自らが死刑となることより、天皇暗殺計画との関係が薄い、あるいは全くない同志らも同様の運命に遭うことに、須賀子は憤っている。

噫、気の毒なる友よ、同志よ。彼等の大半は私共五、六人の為めに、此不幸な巻添にせられたのである。私達と交際して居ったが為めに、此驚くべき犠牲に供せられたのである。無政府主義者であったが為めに、図らず死の淵に投込まれたのである。(同前：247)

捏造された事件についての不公平な裁判は、須賀子の国家に対する不信をいっそう深めた。須賀子は「迫害せよ、迫害せよ、圧力に反抗力の相伴ふという原則を知らないか、迫害せよ、思ひ切って迫害せよ」と、自身の反逆運動を政府の圧制に対する自然かつ必然的な反応として理解し、「旧思想と新思想、帝国主義と無政府主義！」と、政府と自身との衝突に歴史的な意義を見出してもいる（同前：259)。葬られる際には「所謂忠君愛国家の為めに死骸を掘返されて八裂きにでもせられる〔様な〕場合に、余り見苦しくな

い様にして居たいと思ふので、死装束などに就て相談をした」と愛国主義者を揶揄しながら、ユーモアをもって死地に近づく自らの気を晴らそうとしていた（同前：251）。無政府主義・社会主義への須賀子の信念は、死の恐怖を慰藉する役割を果たしていると考え得るだろう。

さらに須賀子は、理想が実現されるまでに、「犠牲」が出ることもまた「必ずや踏まなければならない階梯」だと主張している（同前：251）。数多くの犠牲を払って初めてキリスト教が世界の宗教になり得た、とイエスの故事をほのめかす須賀子は、自身をイエスに譬えているとも読むことができる。ただしこれは既にキリスト教から疎遠になっていた須賀子の信仰表明として理解すべきではなく、自らの死は無意味ではない、という希望の表明だと理解すべきである。須賀子は教誨や宗教的慰安を拒み、「絶対に権威を認めない無政府主義者が、死と当面したからと言って、遽かに弥陀という一の権威に縋って、被(ママ)めて安心を得るというのは〔真の無政府主義者として〕些か滑稽に感じられる」と主張してもいた（同前：250-251）。

この主張にみられるように、須賀子にとって無政府主義とは、政治的な運動にとどまらず、思想の絶対的な自由でもある。たとえば国家の奴隷たる裁判官に対しても、獄中の須賀子は思想の自由を実行してみせる。

> 憐むべき裁判官よ、政府の奴隷よ、私は汝等を憤るよりも、寧ろ汝等を憐んでやるのである。身は鉄窓に繋がれても、自由の思想界に翼を拡げて、何者の束縛を干渉をも受けない我々の眼に映ずる汝等は、実に憐むべき人間である。人と生まれて人たる価値の無い、憐れむべきべき〔動物〕人間である。自由なき百年の奴隷的生涯が、果して幾何の価値があるか？　憐れむべき奴隷よ、憐れむべき裁判官よ。（同前：261）

須賀子は主義によって実存的な恐怖に陥らずに勇気と慰安をもって死に直面することができたと上記の引用から解釈できるだろう。主義は彼女にとって精神的な自由を与えながら、その死に意義をつけるものだと指摘できるのである。

4．結論

4.1〝生き方〟に対する抑圧

日本無政府主義運動史において管野須賀子の占めるべき位置を検討する際に、彼女が日本で最初に無政府主義者を自称した女性であることは特筆されよう。加えて、捏造された告訴によって死刑の判決を下された須賀子らは、社会主義者や無政府主義者に対する国家の恐怖と脆弱性かつ、証拠を捏造してまで極端な手段をとる政府の覚悟を判明させると示唆される。

しかし須賀子が、日本無政府主義運動史だけでなく日本社会主義運動史においても重要な位置を占めていると考えられるのは、別の理由による。というのは、須賀子の仲間であったはずの社会主義者の同志た

ちから受けた虐待や侮辱が、当時の社会主義運動に潜んでいだ問題を浮き彫りにするからである。繰り返しになるが、須賀子が対峙した「男尊女卑」の文化は当時の日本文化の基底的成分であり、当時の日本社会のあらゆる部分に浸透していたため、社会主義界隈のみが、「男尊女卑」に対して主義に基づいて拒絶し得た、と考えることは困難である。

関口（2014）が明らかにしているように、日本社会主義運動史の草分けである平民社にさえ、女性に対する軽蔑がみられた。例えばあるメンバーは、日本女子大学を売淫の場所だと罵倒し、華族女学校の設立に尽力した下田歌子を「妖婦」として描き出した（同前：29-35）。須賀子もまた、秋水と恋人関係になった際には、「妖婦」などと侮蔑された（同前：35-47）。この背景には、依然として須賀子の夫として見做されていた獄中の荒畑寒村が、秋水に自身の妻を奪われたと考えられていた、という事情があるらしい。知人たちは須賀子を不貞な妖婦だと批判し、多くの同志たちが須賀子から離反していった。しかし当時既に、須賀子は寒村と別れていた、と大逆事件における尋問の際に須賀子は述べている（管野1984c：205-208）。赤旗事件で収監された寒村たちを訪問して差し入れができるように、手続きの便宜上「寒村の内縁の妻」と記載していたことが、寒村の誤解を生んだとも言われている（立石2016：54）。

より重要なことは、既にRaddeker（[1997] 2016：175）が指摘しているように、〝秋水が寒村の妻を奪った〟という非難の言説には、女性を物と同様に見なす女性観が反映されてはいないか、という問題である。別言すれば、須賀子の〝生き方〟そのものが、社会主義運動の中にも女性差別が存在し得た証左となるのである。

4.2 無政府主義の必然

先に引用した「肱鉄砲」（管野1984b：111-114）を再び考察してみよう。社会における女性の位置をめぐる問題が解決されるために「勿論社会主義に俟たざる可らず」という言明には、社会主義とは平等に基づいた制度であり、その中においてのみ男女平等が実現される、という須賀子の社会主義観と差別廃絶への展望を見ることができる。須賀子は、階級のない社会主義はすなわち経済的平等を意味しているのだから、男性に頼らず女性が真に自立した自由な人生を送るためには、社会主義が必要だと主張している。

しかし須賀子は、「而も我等婦人は尚夫（それ）以外に、此我儘勝手なる男子閥とも戦はざる可からざるなり」と言う。つまり、資本家に対する労働者の戦いを、男子閥に対する女性の戦いと同等にみなし、両者を並行する闘争として取り扱っている。社会主義の実現とともに女性に対する差別や軽蔑も自然に消え去る――と須賀子が信じていたかどうかは不明であるが、二つの闘争の並行性に関する考察を敷衍すれば、社会主義がこの世に建設されようとも、男尊女卑などの差別と抑圧は残る可能性がある、と須賀子は考えていた可能性がある。先に述べた平民社内での女性差別は、この事実を物語っているとも言える。すなわち進歩的な考え方の持ち主であるはずの社会主義者が、性別によって人々を判断することは、貧富による階級の廃止によって、女性に対する軽蔑や差別など、あらゆる抑圧が自然に解決されるはずがないことを示唆している。

ここに無政府主義の必然性が、理論的にもまた〝生き方〟においても現れるだろう。無政府主義とは古

代ギリシャ語から作られたアナーキズムという単語の翻訳である。アナーキズムとは、支配者・統治者・政府を意味する「αρχος」という単語と、「ἀν」という否定の接頭辞とから合成された言葉である。この意味では「無政府主義」という翻訳は適切だが、栗原康（2018：8-9）が指摘しているように、もう一つの解釈もある。「αρχος」とは「ἀρχή」というより基本的な単語からの派生語であり、「ἀρχή」とは「万物の原始」「根源的原理」「はじまり」「根拠」を意味している。したがってアナーキズムは〝無根拠主義〟とも翻訳可能である。根拠のない〝生き方〟とは、全く何にも支配されない生活方法である。例えば、資本主義の中では金銭がすべての根拠とはじまりであるから、よりよい生活が送れるようにはまず金銭を稼がなければならないという原則がある。畢竟この原則に思考や行動を適合させることで、われわれは資本の支配下に身も心も置くことになるのである（同前：9-10）。アナーキスティックな〝生き方〟とは、人生を統制するあらゆる根拠を否定し、過去による束縛や将来に対する悩みにほだされず、現在、つまり今の瞬間を享受して自由に生きることである（同前：10-11）。

須賀子の無政府主義に関する解釈は、文字どおり政府のない社会制度であった。彼女が国家の迫害によって無政府主義者になった事実から、このように理解することが出来る。しかし無政府主義を、根拠のない〝生き方〟として捉え直せば、社会主義者たちから須賀子が被った性差別に対する辛辣な批判と徹底した抵抗という範囲にまで、須賀子の「無政府主義」は拡張できると論者は推測している。彼女の被った性差別は当時の日本社会において男性が〝根拠〟とされたことに基づいていたといえる。この根拠は、女性に相応しいとされる行動様式を強制し、社会における位置づけと役割を指定する。須賀子は自身の同志らによる性差別を非難しなかったが、彼女の〝男子閥〟に対する批判および自由な〝生き方〟は、無意識的であるとしても、無根拠主義としての無政府主義を孕むものであったのではないかと論者は考えている。

参考文献

[1] ― 管野須賀子、1984a、「黄色眼鏡」清水卯之助編『管野須賀子全集第１巻』弘隆社、5-19.

[2] ―――、1984a、「公園と名士」清水卯之助編『管野須賀子全集第１巻』弘隆社、122-148.

[3] ―――、1984a、「小松宮殿下の御遺徳」清水卯之助編『管野須賀子全集第１巻』弘隆社、263-266.

[4] ―――、1984a、「美術館前の二十分」清水卯之助『管野須賀子全集第１巻』弘隆社、357-366.

[5] ―――、1984b、「戦争と婦人」清水卯之助編『管野須賀子全集第２巻』弘隆社、5-8.

[6] ―――、1984b、「筆の雫」清水卯之助編『管野須賀子全集第２巻』弘隆社、38-40.

[7] ―――、1984b、「感片」清水卯之助編『管野須賀子全集第２巻』弘隆社、48-50.

[8] ―――、1984b、「無言の涙」清水卯之助編『管野須賀子全集第２巻』弘隆社、68.

[9] ―――、1984b、「県下の女子に檄す：……咄、置娼……」清水卯之助編『管野須賀子全集第２巻』弘隆社、69-71.

[10] ―――、1984b、「憤片」清水卯之助編『管野須賀子全集第２巻』弘隆社、72.

[11] ―――、1984b、「牟婁日誌」清水卯之助編『管野須賀子全集第２巻』弘隆社、73-89.

[12] ―――、1984b、「三十一文字（みそひともじ）の音楽会見聞記」清水卯之助編『管野須賀子全集第２巻』弘隆社、105-106.

[13] ―――、1984b、「肱鉄砲」清水卯之助編『管野須賀子全集第２巻』弘隆社、111-114.

[14] ―――、1984b、「男子側面観」清水卯之助編『管野須賀子全集第２巻』弘隆社、139-141.

[15] ———、1984b、「女としての希望」清水卯之助編『管野須賀子全集第２巻』弘隆社、143-145.
[16] ———、1984b、「理想の婦人」清水卯之助編『管野須賀子全集第２巻』弘隆社、175-178.
[17] ———、1984b、「女囚と女工」清水卯之助編『管野須賀子全集第２巻』弘隆社、179-182.
[18] ———、1984b、「お縫さん」清水卯之助編『管野須賀子全集第２巻』弘隆社、188-190.
[19] ———、1984b、「理想郷」清水卯之助編『管野須賀子全集第２巻』弘隆社、198-203.
[20] ———、1984b、「平民社より」清水卯之助編『管野須賀子全種第２巻』弘隆社、242-244.
[21] ———、1984b、「死出の道艸」清水卯之助編『管野須賀子全集第２巻』弘隆社、245-280.
[22] ———、1984b、「おもかげ」清水卯之助編『管野須賀子全集第２巻』弘隆社、292-303.
[23] ———、1984c、「絶交」清水卯之助編『管野須賀子全集第３巻』弘隆社、44-50.
[24] ———、1984c、「永江為政宛」、清水卯之助編『管野須賀子全集第３巻』弘隆社、139-140.
[25] ———、1984c、「大逆事件訴訟記録：管野スガ聴取書・尋問書」清水卯之助編『管野須賀子全集第３巻』弘隆社、193-292.
[26] ― 栗原康、2018、『アナキズム：一丸となってバラバラに生きろ』岩波新書 .
[27] ― 関口すみ子、2014、『管野スガ再考：婦人矯風会から大逆事件へ』白澤社.
[28] ― 立石泰雄、2016、「幸徳との出会いから大逆事件まで」管野須賀子研究会『管野須賀子と大逆事件：自由・平等・平和を求めた人びと』せせらぎ出版、48-64.
[29] ― 田中伸尚、2016、『飾らず、偽らず、欺かず：管野須賀子と伊藤野枝』岩波書店.
[30] ― 三本弘乗・坂本悦巳・長谷悦子、2016「管野の獄中生活から」管野須賀子研究会『管野須賀子と大逆事件：自由・平等・平和を求めた人びと』せせらぎ出版、65-95.
[31] ― Crump, John, 1983, *The Origins of Socialist Thought in Japan*. London: Routledge.
[32] ― Hane, Mikiso ed., 1988, *Reflections on the Way to the Gallows: Rebel Women in Prewar Japan*. Berkeley, Los Angeles, and London: University of California Press.
[33] ― Mackie, Vera, 2003, *Feminism in Modern Japan: Citizenship, Embodiment and Sexuality*. Cambridge: Cambridge University Press.
[34] ― Molony, Barbara, 2005, “The Quest for Women’s Rights in Turn-of-the-Century Japan,” Molony, Barbara and Uno, Kathleen eds., *Gendering Modern Japanese History*. Cambridge (Massachusetts) and London: Harvard University East Asia Center, 463-492.
[35] ― Raddeker, Hélène Bowen, [1997] 2016, *Treacherous Women of Imperial Japan: Patriarchal Fictions, Patricidal Fantasies*. Abingdon and New York: Routledge.

注

1）婿が嫁の戸籍に入るという例外は息子のいない家族の中でその嫁が一人娘あるいは長女である場合のみであった（Hane ed. 1988：9、編集者の序論から）。

2）1913 年 1 月に発行された『青鞜』の「新しい女」という特集号において、堀保子は「私は古い女です」を掲載した。ただし、これは大杉栄が書いた可能性があるため、堀保子が必ずしも〝古い女〟に該当するかは明確ではないと指摘されている（関口 2014：154-155）。

Kanno Sugako's "Lifestyle" and the Necessity of Anarchism

Dolinšek, SAŠO

Abstract:

This article explores the role and significance of anarchism in the thought and "lifestyle" of Kanno Sugako, a journalist and revolutionary from the Meiji Era. I approach the formation of Sugako's thought by dividing it into the three ideological categories of feminism, socialism, and anarchism. While considering the relationship among these ideologies, I expose socialist ideology's impotence in solving the problem of gender discrimination, which strongly affected Sugako. I propose the consideration of a solution in anarchism that extends beyond advocacy for the abolition of the state to encompass a free "lifestyle" that is not ruled by anything or anyone. I suggest that commonalities are perceptible between Sugako's "lifestyle" and anarchism in the broad sense.

Key Words : Kanno Sugako, feminism, socialism, anarchism, lifestyle